



【農業列島】  
産地ルポ

スイートコーン

北海道 JA道北なよろ

北海道の野菜栽培北限あたり、JA道北なよるの  
スイートコーン「ほしつぶコーン(Y・61)」  
もぎ朝もぎで市場評価が高い

(編集部)

この記事は2017年8月末に取材したものです



↑6.5haのスイートコーンを栽培する島井さんは取材当時33歳で部会の理事。



地域概況

北海道の内陸部名寄盆地。野菜栽培の北限近くになる当地は、アスパラガスや馬鈴薯、カボチャにキャベツなどが栽培されていますが、栽培面積は280haを誇る特産品がスイートコーンです。

盆地特有の気候で夏と冬の寒暖差は60℃もあり、昼夜の寒暖差も大きい地域です。スイートコーンは、昼間に太陽の恵みをいっぱい浴びて生長し、夜間太陽が沈んでいる間にエネルギーを蓄えます。この地域は夏でも夜は気温が下がるので、そのエネルギーを蓄えることに非常に適しており、甘さの元になります。名寄全域のスイートコーンが甘くおいしいといわれる所以です。スイートコーンを出荷するコーン菜組合員は120戸。道内3市場、道外19市場へ幅広く出荷されていきます。

市場評価もよく

この地のスイートコーンの市場評価が高い理由は気候による利点以外にもあります。それは朝8時までに終える収穫すべてでいいいな手もぎを実施することです。収穫後は11時までに箱詰めしてJAへ持ち込まれ、出荷物は検査員によるサンプル検査を経て、真空予冷を実施して当日出荷を実現。外観、鮮度、食味を高めています。おかげで「しなび」のクレームがない産地で



↑不良環境下に強い「ほしつぶコーン」は耐倒伏性も強い。倒れないことで受粉しやすく先端不稔が少ない。



↑気根が強く、倒伏に強い「ほしつぶコーン」。



↑サンプル検査には糖度の測定もある。



↑品質を高め産地の評価を上げている理由の一つが真空予冷の実施にある。



←箱詰めの際には下葉をはさみで8cmに切る。



↑マルチは草丈が膝丈になればはがされる。追肥はその後1回と、雄穂が出たときの2回実施。

## 太りがよい

す。  
そんな当地で、栽培面積を増やしているのが強甘味黄粒種「ほしつぶコーン」です。「Y-61」の試交番号時代から導入され、2021年の作付面積は35ha。4月上旬から6月下旬播種の4月末～7月10日定植、出荷は8月上旬から10月上旬にかけての作型です。ほぼパーポットによる育苗で、本圃はマルチ栽培。作型初期にはトンネルあるいはベタがけを使用します。「ほしつぶコーン」は先づまり不足の心配がある早い作型を避け、遅い播種での推奨とされていますが、万遍なくまかれていたようです。

J Aさんにご案内いただいた生産者

は智恵文地区の島井勝久さん。幹線道路沿いにある圃場は、名寄の夏らしいひまわり畑の奥にありました。

圃場に到着して目にしたのは隣の90日タイプの品種と比べ「ほしつぶコーン」の草丈の低さです。同じ時期の定植らしいのですが、大きく差がでています。90日タイプの品種は元来倒伏に強い品種らしいのですが、草丈の低い「ほしつぶコーン」もさらに風に強いそうです。

「昨年(2016年)、北海道には来ないと言われた台風が4つもきたけどこの品種は倒されず大丈夫でした」

丈が低いことはもう一つ利点があります。名寄では着穂後は害虫よけに雄穂を除去しますが、低い位置にあるためカットしやすいそうです。

さらに特長として、太りがよいということが挙げられます。2L級(穂長20cm、重さ皮付410～509g)によくそろうので、収量が上がるといいます。ちなみに2Lサイズはケース22本入り(縦入れ)となります。  
「2L率は70～80%に届いています」  
通常はよくて70%程度だそうです。

## 先づまりも良好で

さらに島井さんは粒のつまりのよさもあげていただきました。  
「先づまりも心配ないし、粒列もきれ

いにそろいます」

品質面、栽培面ともイエロー種の中で他品種に負けてないとのこと。

特に名寄では先述のようにJ Aに出荷されてきたスイートコーンを、検査員が「過熟でないか」「しなびがないか」「先端不稔がないか」「虫が入ってないか」などを厳しくチェックすることで、出荷先からのクレーム知らずというほどこです。試作から実績を重ねた「ほしつぶコーン」はこうした基準をクリアできる特性を発揮しているようです。

品種名が「ほしつぶコーン」と決まった今、市場評価の高い名寄のスイートコーンを支える主力品種になっています。



↑同じ6月18日定植の手前が「ほしつぶコーン」で、背後の高い草丈が90日タイプの他品種。